

史料館報

第 57 号

平成 4 年 10 月

外交史料館所蔵外務省記録について

— 外務省記録の編纂と分類の歴史 —

柳 下 宙 子

(外務省外交史料館)

はじめに

外交史料館は、外務省記録を含めわが国の戦前期の外交記録を公開する施設として昭和四十六年四月東京都港区麻布台に開設された。

この外交史料館に所蔵する戦前期の外交記録は、外務省創設以前の幕末期の外交記録である「通信全覧」及び「統通信全覧」、外務省創設以来太平洋戦争終結までのわが国の外交活動の記録である外務省記録、また、戦前期の二国間・多国間の条約書、そして諸外国の大使、公使がわが国に着任の際奉呈した国書・親書に大別されるが、これら所蔵史料の中で今までに多くの研究者に利用され、その史料価値が高く評価されているのは、約四万冊のファイル

数える外務省記録である。

筆者は、「外交史料館所蔵記録の整理と閲覧について」(「びぶろす」国立国会図書館図書館協力部編「68 vol.39 No.5」)において、以前より関心を抱いていた外務省記録の編纂や分類について外交史料館所蔵の外交記録の説明と併せて述べる機会を得たが、本稿ではその後知ることのできた事実を加えて外務省記録について、またその分類方法の変遷について述べることにする。

一 外務省記録について

外務省記録とはどのような史料であるかを述べるには、昭和六年五月に制定された「外務省文書編纂規程」が大変参考になる。同規程では「記

外交史料館所蔵外務省記録について

目

史料管理学研修会参加記……………柳下 宙子 (1)
史料管理学研究会参加記……………細井 守 (4)
「日本実業史博物館旧蔵古紙幣目録」の編集を終えて……………鶴岡実枝子 (6)

次

史料ラベルの貼付を考える……………廣瀬 睦 (8)

受贈図書……………(11)
集報……………(14)

録」について以下の様に定めている。

第2条 本規程ニ文書ト称スルハ公信、半公信、覚書、口上書、電信、国書、親書、条約書、取極書、契約書、諸帳簿其ノ他公務ニ関スル一切ノ書類ヲ謂フ

処理済文書ハ之ヲ記録文書ト称ス

第3条 記録文書ヲ編纂シタルモノヲ記録ト称ス

また、編纂の方法については以下の通り規定している。

第5条 記録文書ハ事件又ハ事類ニ依リ件別ニ編纂ス(以下省略)

つまり、外務省において執務に係した書類は「文書」であり、そのうち処理済の文書が「記録文書」である。そして、この「記録文書」を事件・書類別にファイリングしたものが「記録」である。

また、「記録文書」の種類は、外務本省と各国に設置された在外公館(大使館・公使館、総領事館など)の間で交わされた電報や公信、それ

に付属する文書や資料が主であり、その他にも執務に係した在京各国公館および国内の他官庁や地方官庁、民間企業や団体との間で交換された文書、資料も多く綴られている。い

ずれも外交交渉の過程を知ることが出来る貴重な文書史料である。なお条約書や国書・親書は「文書」ではあるが、記録ファイルには編纂せず別途分類整理されている(前掲規程第16条)。

二 記録分類の変遷

— 記録編纂事務担当局課の変遷とあわせて —

前掲の「外務省文書編纂規程」第4条には以下のように記されている。

第4条 記録文書ノ分類ハ別ニ定ムル外務省文書分類表ニヨル

また、遡って明治二三年に定められた「外務省記録課文書編纂規則」には、

第2条 本則ニ於テ編纂ト称スルハ左ニ列載セル一切ノ手続ヲ正当ニ

履行スルヲ謂フ

第1 (省略)

第2 文書ヲ門類ニ分チ件別ニ編纂スル事

(第3以下略)

とあり、明治時代より外務省独自の分類整理方法により記録文書類の編纂(ファイリング)が続けられてきたことが判る。ここでこの記録編纂事務の骨格とも言える「記録分類表」の変遷をその事務を行った部署の変遷と共に見ていきたい。

(1) 明治初期の文書分類方法

外務省での記録編纂事務は、外務省設置の翌年明治三年四月に「編輯掛」を設置することにより開始され、以後「文書司第3課」、「編輯課」、「記録編輯課」とその所管が変る間に記録編輯事務の骨子が完成されていく。

「記録編輯課」は、幕末の外交文書である「統通信全覧」を編纂する「旧記編輯科」と省務の進行に平行して日々の書類の編纂を行う「現今編輯科」の二科で構成されていた。

「現今編輯課」での編纂方法は、省務に関わる書類をすべて修好、通商雑の三類に分類し、さらに地理的(イロハ順)に細分し簿冊に綴ると同時に、その写しを二七の部に分類

し一件一冊の簿冊を作成するというものであった。この二七部分類方法(表1)の特徴は、当時の外交活動において重要問題であった朝鮮、琉球、台湾の項目が独立して設定されている点である。

(2) 一六形式分類表

明治七年の機構改正により記録編輯課は「記録局」に昇格し、明治九年には初めて「外務省記録分類表」が作成される(表2)。この分類表はドイツ政府の文書分類表を参考にして作成されたものであるが、まず一六の「類」(後に「門」に変更)に大別し、その各類を「通」と「特」に分け、さらにそれぞれをいくつかの小項目に分けるというものであった。

(3) 二七門式分類表

この一六門分類法は一年半実施された後、明治二年に新たな二七門式の文書類別表(表3)に改正される。これは、前述の「統通信全覧」や明治初期の二七部分類法とは異なり、従来の分類表の問題点を研究、改善して完成されたものであった。

この二七門式分類表はこの後何度か改正されるが、明治四二年の改正の際に二七の門はそれぞれいくつかの「類」に区分され、さらに「類」

はいくつかの「項」に細分される方法が採用された。この「門」「類」「項」による細分方法は以後の外務省文書分類表に引き継がれていくことになる。

なお、二七門式分類表採用以前に編纂された明治二〇年までの文書は、明治三〇年までにこの分類に編纂し直されている。

さて、記録局は明治二三年に廃止され、記録事務は「総務局記録課」の所管となるが、前掲の「外務省記録文書編纂規則」はこの年に制定され、以後の記録編纂の基礎となる。

その後明治三年には記録課の業務が分業され、日々の文書の接受、発送等の事務を受け持つ「文書課」が記録課から分課するが、記録編纂事務は記録課において継続されている。また、明治四一年には記録課の編纂事務は、政務局および報告課、人事課、電信課関係の文書の編纂や条約書、国書・親書の保存を担当する一部と通商局および取締課、会計課の文書の編纂を担当する二部とに分けられ事務の充実が図られた。

しかし大正二年六月の機構改革により記録課は文書課に吸収され「記録係」となり、以後記録編纂事務は文書課の所掌事務の一部となり現在に至っている。

(4) 八門式分類表

第一次世界大戦後、日本の国際的地位が向上し、国際情勢も変化するに従って、従来の二七門分類表が記録文書の分類に対応できなくなったため、大正一〇年に八門式分類表が採用され、翌年より実施された。

八門式分類表は、外務省の機構を基本において、当時の国際情勢と外交活動に対応できるよう考慮して二七の門を八つに集約したものである。特に、多様化した外交活動に対応するため二七門式の「国際」は「政治」「条約」に分離したこと、経済に関わる項目はすべて「通商」という一つの門にまとめて類の段階で細分化したことは分類上の大きな改革であった。

なお、この八門式分類表を採用するにあたってそれまでに二七門式によつて分類整理されていた記録類は、件名はそのまま残して分類番号を付け直したので、結果的には明治・大正期の記録はすべてこの八門式分類表により分類されることになる。

明治・大正期の記録の特徴は、ほとんどの記録が一件一冊主義をとっていることである。例えば「本邦移民布哇出稼一件」(分類番号八門八

類二項三号)や「林伯爵外務大臣在職中対外政策二関シ伊藤侯爵ト意見交換一件」(分類番号一門一類一項五号)のように詳細に事件を伝える件名が付けられている。また、本冊と別冊の關係は件名に「別冊」と付けることで表し、分類番号上にその区別は表れない。

(5) デイスマル式分類法

ところが、八門式分類は科学的な研究が欠如していたことが指摘され、採用二年後には当時欧米で普及していた科学的な文書分類方法であるデイスマル・システムの導入を検討することになり、昭和二年に外務省用のデイスマル式分類法が作成され、同年実施された。

このデイスマル式分類法は、まず省務を合計一、七五一の項目に細分化し、それを七つの基本部門(表5)に分け、該当する細項目に文書を分類するものであり、従来のように簿冊形態に編纂せず、バインダーを用いる方法を採用したことも画期的であった。

しかしこの新たな分類方法は、採用の翌年に済南事変が勃発したことやバインダーによる編纂方法が職員から不評であったことなどから早く

も採用二年後には新たな分類方法について検討が行われることになった。

(6) ABC式分類表

昭和五年に採用されたこの方式は、今までの分類方法の欠点を研究し改良したものであり(表6)、大きな特徴は以下のとおりである。①AからZの一六の門に大別する。しかしPからYの門は今後の外交活動の動きによって増補できるように未設定とした。②門、類、項の下にさらに「目」を儲け四段階の細分化を行う。

③あらかじめ類、項、目までの項目を設定しておくが、これらには必要に応じて増補することを可能とした。

また、総記の意味を持つ「〇類」「〇項」「〇目」を設けた。④目の下に各簿冊を表す「号」を設け、別冊はこの号にハイフンをつけて表記したので本冊との關係が分類番号上で明らかにした(例 B1200.1-1-1)。⑤分類番号上で国名表記ができるように国名をアルファベット記号化した(例えば「」は日米間を表す)。

なお、デイスマル式によって分類されていた記録文書はすべてこのABC式に編纂したが、明治・大正期の記録類は再編纂せずにそのまま残して「旧記録」とし、ABC式分類

による昭和期の記録は「新記録」として区別したので、現存する戦前期の外務省記録はこの二つの分類方法により整理されていることになる。

このABC式によると前述の旧記録のハワイ移民關係の記録は「本邦移民關係雜件 布哇ノ部」(分類番号J門一類二項〇目「J12」)のよう表され、別冊の段階で地域や事件を示すこと、また、別冊の關係が分類番号上でハイフンを使って示すようになったことが判る。

(7) 記録編纂事務の重要性

以上、明治初年からの記録編纂の変遷を見てきたが、この記録編纂事業は、外交活動が先例主義であることを重視して、明治初年以來一貫して省務の必要に応じて的確な記録を迅速に提供することを第一の目的として行われたことを再認識することが出来た。常により良い記録編纂方法を求めて改善を行ってきたのはそのためである。

昭和八年十一月の考査部に関する枢密院審査委員會の席上で元外相の石井菊次郎顧問官が「書類整備の完否は結局、外交の勝敗を決するもの」と発言し、金子堅太郎委員長が「外交文書整理の如き根底的の事業に力を入れる要あり」と述べた事実は、

これらの権力者が外務省記録整理の必要性を大いに認めていたことを物語るものである。

なお、外務省では記録分類整理と同様に記録の保存にも努めており、大正一二年には強固な鉄筋コンクリート四階建の書庫を完成させ記録を保存し、戦時中には記録を疎開させるなど行っていたが、これについては新たな機会に記すこととしたい。

三 「外務省外交史料館所蔵

外務省記録総目録」の刊行

外交史料館は昨年開館二〇周年を迎えたが、その記録事業の一環として、所蔵する戦前期の外務省記録の件名総目録である「外交史料館所蔵外務省記録総目録」(全三巻)を刊行することになった。

本目録は三巻で構成されるが、第一巻には「旧記録」(明治・大正期の記録)、第二巻には「新記録」(昭和戦前期の記録)が収録されている。また、別巻には事項による索引や資料を収録する。なお、本目録に収録されたのは現存する記録の分類番号および記録件名(簿冊のタイトル)と冊数であるが、その数は「旧記録」が約一万四千件、約二万二千冊、「新記録」が約一万一千件、約一万

八千冊にのぼる。

筆者はこの目録刊行のスタッフとして作業を担当したが、この膨大な外務省記録が記録編纂事務に関わった多くの先輩方の地道な努力の結晶であることを改めて認識することができた。この貴重な外務省記録が後世に引き継がれ、多くの調査、研究に役立つことを期待したい。

(表1)

礼典 官職 条約 規則 租税 (附手数料)	地所 (附地家租) 軍事 (附局外中立)
財貨 国産 工業 船艦 開港 (附開市)	博覧会 外人雇傭 外人旅行 (附遊歩規程)
宗旨 密商 盜難 暴行 (附殺傷 不敬)	訴訟 遺外使臣 (附土民海外行) 各国公使館
雜 朝鮮事務 琉球事務 台灣事務	

(表2)

第一類 事務章程	第九類 海軍
第二類 官吏関係事項	第十類 殖民
第三類 商務及漁業	第十一類 工業
第四類 勸業	第十二類 内治
第五類 農務及牧畜	第十三類 皇室
第六類 陸軍	第十四類 外交交渉
第七類 裁判	第十五類 雜
第八類 教育	第十六類 會計

(表3)

第一門 皇室	第十五門 貨幣及度量衡
第二門 礼典	第十六門 土木及工事
第三門 修好通商 (後に國際)	
第四門 官職	第十七門 農工商及物品
第五門 賞勲及贈答	第十八門 博覧会及供進会
第六門 港市	第十九門 宗教
第七門 税関及輸出入	第二十門 學術及教育
第八門 租税	第二十一門 文書及圖書

第九門 土地及家宅	第二十二門 衛生及薬剤
第十門 人事	第二十三門 陸海軍
第十一門 雇傭及移住	第二十四門 戦闘及暴動
第十二門 旅行及僑居	第二十五門 司法及警察
第十三門 通信	第二十六門 會計
第十四門 船艦及航海	第二十七門 雜

(表4)

第一門 政治	第五門 軍事
第二門 条約	第六門 人事
第三門 通商	第七門 文書及圖書
第四門 司法及警察	第八門 會計

(表5)

0 一般及雜
1 帝國政府ノ行政組織
2 利益ノ保護及國家ニ對スル請求
3 國際會議及國際條約
4 通商及通商關係
5 國家ノ政治關係及條約
6 各國國內事項

(表6)

A門 外交、政治
B門 條約、協定、國際會議
C門 軍事
D門 司法、警察
E門 財政、經濟、産業、貿易
F門 交通、通信
G門 都市、港灣、土木、建築、土地、建物
H門 東方文化事業
I門 文化、宗教、衛生、労働及社會問題
J門 移民、旅券
K門 内外人外國在留、旅行及保護、取締
L門 元首、皇室、賞勲、表彰、儀禮、贈答
M門 官制、官職
N門 文書、圖書
O門 會計
Z門 先例及雜

史料管理学研修会参加記

細井 守

(藤沢市文書館)

私が現在の職場(藤沢市文書館)に配属されたのは昨年の四月で、実に四年ぶりに再び文書館業務に携わることになった。久しぶりの仕事で何をすればよいのか戸惑っているうちに、あつと言つ間に七月が来て、平成三年度史料管理学研修会(長期研修課程)に参加することとなった。

以前に「近世史料取扱講習会」を受けたことがあるので、史料館通いは二度目の経験になる。ただ、前回確か一週間と期間も短く、カリキュラムも随分と異なっていたので、今回は、「これから」という時期の私に、うってつけの研修であった。

参加しての一番の印象は、内容の幅の広さである。以前の「講習会」と比較する必要もないが、いわゆる「史料論」中心組み立てから「史料管理論」へと変身するにあたって、実に多くのものを取り込んできていると言える。過日、中国におけるアーキビスト養成のプログラムを拝見したが、それに匹敵する内容構成であると言ったら褒めすぎであろうか。どの講義も第一線で研究や業務に携わっている方々の最新の情報に基

づいた、新鮮かつ具体的な内容で、実に充実した二カ月間を過ごすことができたと思う。

その中でも、特に刺激になったという意味では、大藤氏の「史料論総論」と増田・坂本・稲葉各氏による「史料の保存科学」を挙げたい。

「史料論総論」で言われていたことの核心は、総体的な「史料学」の必要性ではなかったかと思う。講義要綱に「史料学の目的と意義を、史料の正しい整理・保存管理および利用を保証すること、史料そのものの多角的考察を通じて、それを生み出した国家や社会、文化、人間の活動のあり方を照射すること」と書かれているが、正にこれこそズバリ文書館(史料保存利用機関)にとっての史料に対する基本的態度を裏打ちする学問定義ではないかと思う。

「史料」というネーミングのせいか、従来「史料学」というとあくまで「歴史学」の一分野のごとく扱われているくらいであったように思えるが、この講義でそれを打ち破る新しい方向性を明確に認識できたことが、今回の研修で私にとっては大きな刺

激であり、収獲の一つでもあった。

次いで「史料の保存科学」は、史料そのものを自然科学的に見る、扱うという、今まで他人事のように思っていた部分にアプローチの可能性を与えてくれたという意味で、非常に刺激になった講義である。

先の大藤氏の「史料学」の視点とも共通するが、史料を「歴史学の素材」としてだけではなく、自然科学的に、モノとして見たとき、そして保存、利用といった局面で、それにどう対処していくべきかを考えたとき、随分と認識を改めなければという気がしてきた。ちょっと大袈裟だが、改めて文書館として史料を取り扱うことの重大さに気付かされたわけである。端的に言えば、それは史料の立場に立った保存、利用の必要性を認識するということであろう。

そうした目で改めて私の働く館の状態を見ると、またまた大袈裟に聞こえるであろうが、史料の泣き声が至る所で聞こえるような気がする。

研修が終わってはや一年が経って、身に染みたはずのことが、まだまだたくさん放りっぱなしのままではあるが、学んだことを反芻しながら、一つひとつ自らの意識と状況の改善に努めていきたいと思っている。

ところで、一つだけこの研修会に

対する注文めいたことも述べてみたい。

それは、「もっと研修者に声を出させたら？」ということ。

この研修はそもそもどういった層のための研修か。もし、現職者を主な対象に据えているのであれば、一方的に講義をするばかりではなくて、個々の問題について各々の経験してきたこと、日々考えていることを積極的に取り入れて、講義に肉付けしていくべきではないかと思う。

講義の中でそうした試みもなされていたが、きちんとした場の設定がなされていなければ誰でも我慢話っぽくなるのは嫌だし、そんなには話さないのが常であろう。

時間的制約もあるだろうし、参加者の顔触れも文書館の現職者あり、類縁機関の実務者あり、学生ありといった様々な立場の人がいる状態の中では焦点が絞りにくいかも知れないが、ちょっと残念な気がしている。とは言うものの、講義の中で声を出す云々とは別に、この研修会で多く方と知り合えたことだけでも、実は大きな収獲であったと思っている。

最後になってしまったが、講師の方々、史料館職員の皆さん、一緒に受講した研修生の方々にお礼を申し上げ、私の研修の参加記を終えたい。

史料管理学研究会参加記

伊藤 克江

(富山大学大学院)

私が史料管理学研修会に参加してから、はや一年になる。照り返す暑さの中を満員の山手線にゆられ史料館に通ったことが、懐かしく思い出される。生来、北陸の地で安穩としてきた自分は、それだけでも面食らっていた。しかし、研修の講義内容は刺激的で大変興味深いものであった。

そもそもこの研修会は、大学の指導教授に勧められたものであった。大学院も三年目で時間的にも多少余裕があり、さらに研修に参加したことが就職時に有利となるかもしれないということ、非常に軽い気持ちで参加を決めたのであった。その上私の専攻は中世史であり、近世史料についての知識も浅薄であり、また史料の調査・整理に携わったこともなかった。それ故に、他の研修生の方々のようにさしたる問題意識をもつこともなく、「面白そうだな」ということだけで、研修会に臨んだのであった。

研修内容は非常に多彩で、その各々の講義はどれも興味深く、一時も

気が抜けないという感じである。ただ残念なことに、自分の知識の足りなさから十分に理解できなかったことが多々あった。殊に行政史料に関しては、完全に消化不良状態であった。おかしい例えで申し訳ないが、せっかくの心尽くしの料理をだされているにもかかわらず、食べたとしても食べきれない、あるいは食べたとしても私の未熟な舌では味わうことができなかったという感が強い。また、講義のなかで「皆さんはよくご存じだと思えますが……」と講師の方が問題点を指摘されることもあり、私には実感として理解することができなかった。

しかし見学先では、好運にも普段決して入ることのできない書庫まで見せていただき、整然とした膨大な史料に、職員の方々の並々ならぬ努力の跡が窺われ、ただ圧倒されるばかりであった。

私はこの八週間にも及ぶ研修会で直接史料保存に携わる方々と交流することで、自分がこれまで史料に関して、如何に何も考えていなかった

「日本実業史博物館旧蔵古紙幣目録」

の編集を終えて

鶴岡 実枝子

ている。

栄一の生誕百年を期して実現しようとして新しく始まったこの「実業史博物館」の設立構想が如何なるものであったかは明確には伝わらないが、資料蒐集の年代範囲を栄一の生誕から没年までを目途としたというから、栄一の生涯そのものが日本の実業発達の歴史であったという関係者の認識がその底流にあったという命名であったと推測され、日本の近代化の歩みの再現が意図されたと思われる。当初は経済博物館の仮称もあった模様で準備室での蒐集資料の内容は、商業・金融・運輸等を含むあらゆる産業に用いられた器具・例えば看板・暖簾・算盤・千両箱・天秤・鍵・矢立その他の手工業用具・また商業なり工業などに関する絵画・写真・雑誌、会社史・実業家の伝記等と、広い範囲に及んでおり、その一部は「史料館所蔵史料目録第十一集」（一九六五年刊）として目録化されている。

ところで今回「史料館所蔵史料目録第五十七集」として目録化した古

けではなく、また研修に参加したことが将来考慮される背景もないのである。そういう意味でも、依然として大学院生の受講は困難とならざるを得ない状況であるといえよう。

さらに付け加えるならば、地方からの参加は、滞在費のことなどさらに困難さを極めるので、宿泊施設の斡旋なども考えて頂きたいと思う。

最近こちらで目にした文書目録の末尾に、史料の調査・整理における専門職員の必要性が記されていた。そこに記されているように、切実にアーキビストの存在を必要とするなら、職員を研修会に派遣するなり、外部との交流を積極的に推進することが重要なのではないだろうか。非常におこがましい言い方であるが、

以上簡単だが、研修を受けての感想である。しかし自分にとって重要なのは、研修を終えたこれからであろう。いま振り返ってみると、この研修会は史料保存利用機関でのアーキビストの育成に主眼が置かれていたように感じられる。確かに、研修会のねらいのひとつは各史料保存利用機関の情報交換・ネットワーク作りである。しかし大学院生の場合、現実的な問題として、研修を受けてもアーキビストの資格が得られるわ

ちからでの史料保存に関するネットワーク作りが消極的であるように感じられる。幸いこの研修会にも同窓会が設立され、これから人的交流も広がるであろう。このことで、アーキビスト養成課程設立を求める声が、全国的に高まることに期待したい。

末尾となったが、諸先生方をはじめ、史料館の皆様、そして若輩の私に色々教えてくださった研修生の方々に心から感謝申し上げます。

十五年戦争の故に幻となってしまうた日本実業史博物館の設立計画は明治・大正・昭和の三代にわたって日本の実業界をリードした渋沢栄一（一八四〇—一九三一）天保一一—昭和六）の遺徳顕彰記念事業の一として財団法人竜門社によって企画されたものである。準備段階で蒐集された資料は敗戦後の一九五一年（昭和二六）文部省史料館に寄託され、次いで当館が国文学研究資料館に改組以前の六二年（昭和三七）に改めて寄贈の手続がとられ、当館の所蔵に帰したものである。

因みに博物館設立の中心的推進者であった栄一の嫡孫で後継者の渋沢敬三（一八九六—一九六三）は日銀総裁や大蔵大臣を勤めた財界人として著名であるが、一方で大正の末年からアチック・ミュージ엄（のち日本常民文化研究所と改称）を主宰し、在野の研究者を育成すると共に日本の近代化の進行の中で滅びゆく日本の伝統的な生活様式や生産技術を伝える民具をはじめとする民俗資料の蒐集保存を努めたことで知られ

紙幣のコレクションは設立準備室が設けられてから比較的早い時期の昭和一三年頃の入手にかかると推測されるものの、購入品原簿に記録されず、その一部は入手時に若干整理された形跡は認められるが、大部分は梱包のまま手つかずで放置されていたもので、その存在すら館員の殆んども関知するところではなかった。

もっとも半世紀以上放置され続けたとは言ふものの、藩札を初めとするこの江戸期紙幣類のコレクションの入手には、当事者にとっては特別の思い入れがあり、当時としては大枚を投じての購入であつたろうと推測される。何故ならば、栄一が数え年二六才の慶応元年、当時一橋家に仕官して京都に在った時、農兵徴募の御用で播州の一橋領内を巡回中に紙札発行のことを発案、上層部に建議したのが容れられて、大いに一橋家の財用に寄与した事歴が栄一自身の回顧談で語られているからである。

にも拘わらず、旧実業史博物館蒐蔵資料の保管担当者によって未整理のまま放置され続けた所以は、その整理の困難さが充分過ぎるほど予知されていたからと想像される。現に私自身、古紙幣に関する知識は皆無といつてよく、定年目前の仕事として

て先人の置き土産の整理を任されてその梱包を解いた時、これは私の能力を超えたものではないかと、臍を噬む・思いを実感したことを告白しなければならぬ。というのは通常私どもが携わる史料整理というのは、一点ごとの史料について、その周辺の関連史料を探索しながら史料の成立なり性格を確認していくのが常道であるのに、眼前にくり拡げられた紙札群は一点の傍証史料もなしに存在するわけで、勝手の違う戸惑いを覚えざるを得なかった。

なお、該コレクションは凡そ二つの系統から成り、一は敬泉堂なる雅号をもつコレクターの旧蔵品、二は岡山の某所から購入したと思われるもの。両者併わせて総点数二七一一点、それ以外の伝来に関する情報は伝わらない。

ともあれ、整理に着手するに當つて、いわゆる古泉家と呼ばれる人々によつて、このような古紙幣がどのような関心が持たれ、どのような蓄積がなされてきたのかを知ることが先決と、大正七年七月創刊の東洋貨幣協会の月刊誌「貨幣」を通覧することから始まった。この創刊の辞によれば、同会は明治二三年以来統一た東京古泉協会を改組したもので、

改組の理由は「今日迄行ひ来たりたる研究法とて尽く非學術的のみにはあらざりしと雖も、或る程度迄は猶骨董的臭味裡に支配せられつつありき、今一例を挙げれば會員各自の出品せらるるものに於ても研究材料たる好資料のものより寧ろ現存希少な錢貨を出品して其珍を誇らんとし、存在多き品に存する系統の好珍品又は鑄法の特別を有するが如きものは一顧に価せざるものの如く看過し來れる」弊風を打破し、真に學術研究に資することを宣言し、また「古來古泉会なる名称に堪かれて有穿の古錢のみの研究」に偏向している点を指摘し、洋の東西を問わず金銀貨又は旧紙幣にも眼を向けるべきことを提案しており、当時の古泉会の実情を窺うことができる。骨董趣味を脱しようというこの提言が會員にどの程度共感されたかは計り難いが、その後「貨幣」に紙札に関する論説が掲載されるのは大正九年二月から一〇年六月（第二一―二六号）にかけて連載された新渡戸仙岳「盛岡藩錢札に就て」を初出とする。次いで大正一一年六月（三九号）に「經濟史と藩札」なる一文を投じ、藩札研究の重要性を提言した前田淳は「藩札文狂」を自称し、以後同誌に「藩札文

学」と題して、個別の藩札の楮鈔銘の紹介を連載している（現東京大学經濟学部および西宮市黒川古文化研究所所蔵の古紙幣コレクションは藩札狂前田淳の蒐蔵品と仄聞する）。從來古錢が主流を占めていた東京の古泉界において古紙幣の愛好家が漸く市民権を得つつあつた状況を窺わせる。

もっとも、このような東京の古泉界の動向に対し、近世初頭から伊勢や畿内農村に私札の発行をみた上方以西では古紙幣に対する関心はより先行していた模様である。日本全国の古紙幣を渉猟し、該分野のバイオニア的存在となつた京都伏見の華泉堂荒木豊三郎（のち三郎兵衛と改名）の「貨幣」への初投稿は昭和二年二月の九五号であるが、その時点で荒木は既に注目すべき提言を行なっているのである。すなわち「藩札の研究と用語の選定」と題して、藩札の研究も益々精密となつてきた現在、お互が意見の発表、通信上、藩札の述語用語の専用語の統一決定をすべきだといふのである。その言わんとするところの一例を具体的に図示し（左図）、イからオに至る箇所の名称は如何なる用語が適當であるかを問うている。

(札表面)

イ	ロ	ハ
ホ	ニ	ヘ
ト		

(同裏面)

チ		
リ		
ヌ		
オ	ル	ヲ

その反応の有無は知り得ないが、以後荒木は贋札の防止策としての「札の隠し文字について」(九六―八号)、「楮幣の透しについて」(九八号)をはじめ、新発見の紙札の紹介や、学究の紙札に関する論述の他誌からの再録など、精力的な投稿を続け、昭和五年から一年半を費やして刊行した『日本古紙幣類鑑』全八冊に結実したことを知ることができる。

今回「古紙幣目録」を作成するに当たって基本的に参考とさせて頂いた日本銀行調査局編『図録日本の貨幣』第六・第一巻収載の「古紙幣一覧」は、その後の調査研究によって大幅に補遺訂正が加えられたと思うものの、その基礎は荒木の業績を抜きにしては考えられないと思われる。

ただ、昭和の前期という時点で荒木の遺した足跡が大きいほど、それが現在の古札界に呪縛の効果を与え続けたことは否めないと思われる。すなわち荒木自身も認めている通り荒木の「古紙幣類鑑」編集の立場は主として蒐集家に向けられており、

稍もすれば考証もなしに行なわれた先人の説を安易にとり入れた傾向があり、それが少なからず現在に継承されている点である。そしてその現在の古札界に定着している紙札整理の手法は、藩札の場合、藩名に注記される領知高が紙札の発行年に拘わりなく幕末最終期の石高を採用すること、またそれと関連するの明治に立藩した旗本家の紙札が江戸期の発行に拘わらず藩札として扱われることなど違和感が存する。

今回、古紙幣の整理に当たって、従来の手法に疑問を感じた点は素人の厚かましきから私なりの手法をとらせて頂いた。例えば従来藩札・旗本札・寺社札・町村札など発行主体の類別が行なわれ、それらがそれぞれ国別に配列されるのが通例であるが、国別に多様な発行主体の紙札がどのようにに混在していたかを識別できるように配列するなどである。新しい試みの成否は覚束ないが、最も遅れた分野と指摘される近世貨幣史研究に本目録の刊行が聊かなりともお役に立てばと希っている。なお整理に際し、紙札面の篆書体文字の解読を原島陽一氏にお願いし、従来疑問符つきの紙札の解明に貢献して下さい。ことを付記して謝意を表したい。

史料ラベルの貼付を考える

廣瀬 睦

筆者は先に、「史料館における史料保存活動」(山田哲好共同執筆『史料館研究紀要』第二号、以下「保存活動」と略す)を発表した。その後、史料ラベル貼付についての数件の問い合わせに接した。ラベルを貼付する場合、市販された規格化の史料用ラベルはなく、各史料保存利用機関が独自に作成しているケースが多く、夫々工夫して貼付している。こうしたことは史料の利用管理上、已むを得ない措置であるが、一方、原史料に貼付するという行為の後ろめたさから逃れられないのは何処も同じである。そこで、同様の悩みを持つ者の一人として、史料に影響の少ない非破壊の方法・材料と技術を選択し実行するという、史料保存の観点での知見をあきらかにしておくことの必要性を感じた。また、史料館においては、貼付位置の統一基準を決めてはいないが、照合検索のために披見しやすい場所に貼るにあたり、貼付箇所の優先順位と貼付してはならない箇所のルールについては合意ができていない。しかしなが

ら直接貼らずに間接表示を取らざるを得ない史料の扱い方については、例示が必要となってきた。以上の二点が、本稿を記す直接の動機である。

史料ラベルに関する基本的考え方と諸問題については既に一四年前から公表されているので参照されたい(原島陽一「史料とラベル」(『史料館報』二九)「旧い蔵書印とラベル」(『史料館報』三一)「史料の装備と配架」(『史料の整理と管理』岩波書店 第四章二))。ここでは、その考え方を基調とした、実際の作業過程での基本的な方法と技術および改善を図ったものを紹介したい。

ラベル貼付の目的 ①史料の識別のため②史料と目録との照合のため③史料の利用と管理のため、があげられよう。①の場合、識別記号としての整理番号(基本番号)を史料にラベルで表示し、もともとの保存形態に基づいた文書群全体での秩序と位置付けを現し、かつ、原形としての袋や包みに一括されてきた文書群の中に含まれるマトマリの元の姿を枝

番（小番号）で示すことである。

モノとして保存してきた情報を記号化することで、その記号をたどっていくと原形に復せるというのが史料に貼付されたラベルの重要な役割でもある。ここ一五年、文書群の中に含まれるマトマリの姿を尊重し、一括扱いで整理番号と枝番を付与するようになっている。旧来とられた曖昧な単位から精密な史料把握がとられるようになり、その対応としてこれまで以上にラベル貼付対象が増加している点も指摘しておく。さらに、利用者一人あたりの一日の利用点数も増加し、平均五〇点に達そうとしていることもあげておく。

必要以上紙内部に含むことが防げる。かつ、定性濾紙を敷いた上で一度軽く水打ちすることでシミやにじみを防ぐ効果がある。糊の濃度は、紙質に応じて紙厚は濃く、薄めは薄くして調整する。ラベルを貼付するときには定性濾紙を取り除き、シートのみにして、スポンジ上で適量の糊をつけたラベルを乗せ、また定性濾紙を置いて硝子板で固定する。シートを使用することで、他の部分へ糊が付着したり、シミを残すことがなくなり、糊が乾くと自然に剥がれるのが利点である。なお、中性紙製のラベル紙は、吸水性が高いため本紙がぬれていると付きが良くなることもあげておく。安定した素材としての糊・スタンプ台他の用具については前掲「保存活動」一三四・一四一頁に詳細な説明があるので参照されたい。この用具の選択条件は、素材に対するの適合性・安全性、用具としての耐久性・可逆性、取扱いの便利性的五つを満たすことである。

分に補修紙がわりに貼ったり、折り目に貼付して折りを妨げる等は止めたい。また、野線の色刷りは注意しないと滲むものが多い。第二には、外観がよく控え目で、視覚的に邪魔にならないところを選択すること。冊子の空白は中央部にもあるが、不適格である。照合検索のためには見やすい統一箇所を基準としたいところであるが、冊子では余白の多い裏表紙を優先している。一か所に固執せずによく表面を観察し、史料の状態で応じて、安定した箇所を探しだすことである。利用に際して着眼できる範囲とし、史料の破壊とならないことを第一義としなければならぬ。例として図2に通常の優先順位と留意事項をまとめておく。

ラベルを貼らない間接表示法 間接表示法をとるものは、①小片なものの文字が表裏面にわたって貼付スペースがないもの②ひと綴じで括られた史料の枝番の処置③甚だしい劣化状態のものや貼付によって変色・シミが懸念されるもの、また大量の同種印刷物などである。①の例は、付箋・片木・紙幣や葉書等であげられよう。近年、ポリエチレンやポリプロピレン製のフィルムの安定性が科学的に証明されたため、フィルムに封入した間接表示法を採用している。但し、密閉性が大変高いため、中の史料の酸性化を助長させないよう、史料と同程度の厚みの中性紙（pH八・五）を共に入れる方法をとっている。②の場合には、5冊綴の史料に整理番号が5付与されてある時、ひと番だけを貼付し、後は短冊状の和紙にラベルを貼り、袋綴の中の脆弱な部分はさけて、そのスリットを挟み込む間接表示方法である。和紙を割いて繊維の絡みをつけて、史料からのずりおちを防いだものである。近現代の封筒は色付・手書き模様があるため、このスリットを封内に入れ一部を仮糊付けすることも採用している。スリットの他にコヨリに付ける場合もある。③は、これから修復処置を施さなければ利用に供せない史料も含まれる。それは保存容器（封筒・帙）に無ラベルであることを記入する方法をとる。しかし、まとまりを区分けしたい時もあるため、中性紙の薄葉紙を帯状にし、巻いて留め、その帯に貼付する。この方法を応用して皮張手帳も表紙を巻いて間接的表示としている。処置例を保存容器に記録化し、利用者への周知も行っている。応用例は図3に示す。

おわりに 現地での所在調査の場合、

時間的制約もあるのでラベル貼付を行わないことを勧めたい。封筒に番号付けするとか、和紙を史料の縦寸より長く短冊状に切り、冊子なら袋綴の間に挟み、状物は巻きの終りに入れて巻き込んでおく、または帯を巻くのも一つの方法である。拙速に市販の図書ラベルを使用することは史料の破壊に繋がるものである。しかるべき保存利用施設に収蔵された段階で遅くはなく、今以上に史料管理に適した方法がみだされとも限らない。

また、和紙に枠を印刷したラベルを作成している機関もある。同種の紙質の方が最適のようなだが、剝離が容易なのであろうか。膨大な近世近代史料に、黒を使い、番号を打つ作業など、手間を惜しんではならないが労苦のほどが忍ばれる。

ラベル貼付は、単純に見られる作業であるが、史料の状態によって適切な対応が求められる重要な作業である。史料を手にする度に、注意を怠らず貼ったものであっても、現在の方法に満足することなく、史料への影響を最小限にする方法をこれからも考案してゆくべき責務をこたさず痛感している。

図1 ラベル貼付の技術

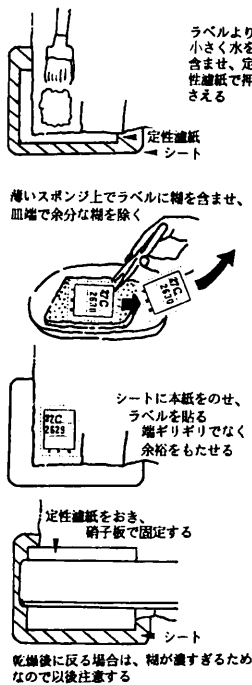


図2 ラベルの貼付場所

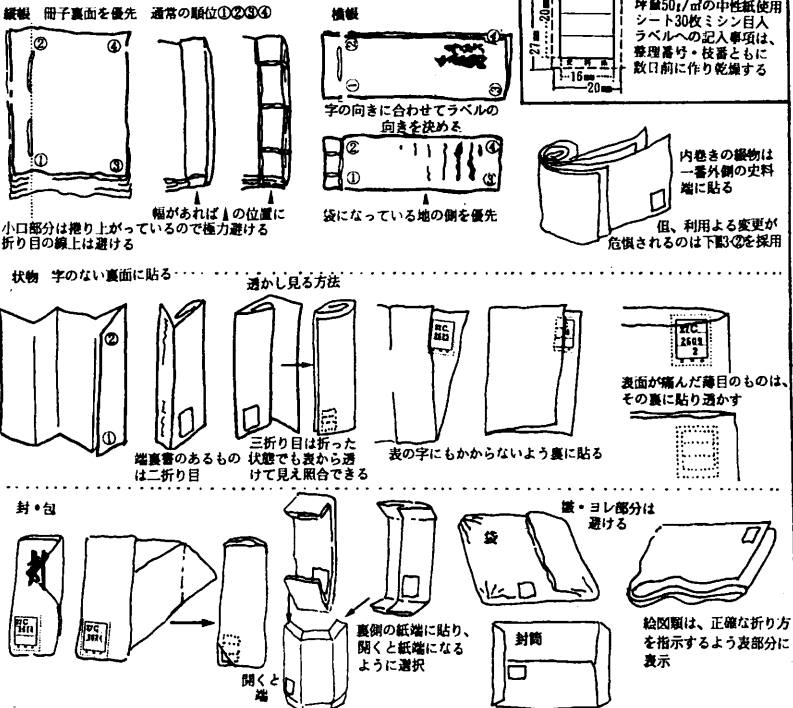
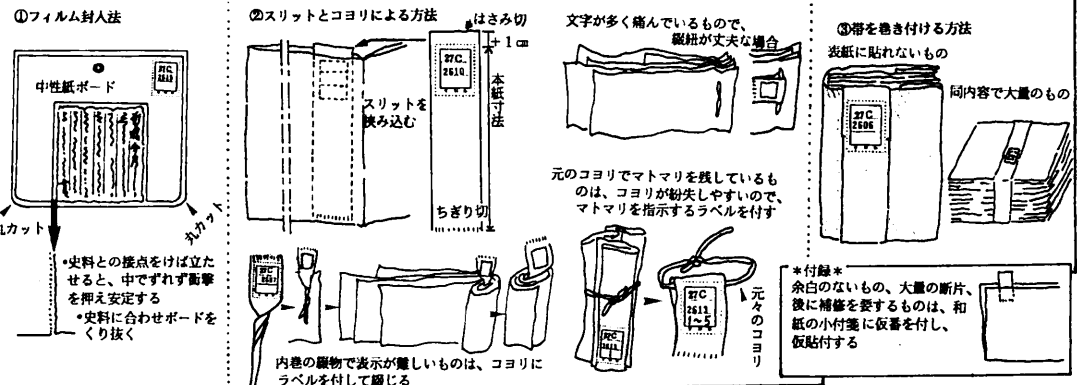


図3 間接表示法



受贈図書 平成三年度 (三)

育委員会

世田谷区民俗調査第9次報告〔世田谷区教育委員会〕

下山遺跡Ⅲ〔同右〕

上神明遺跡Ⅱ〔同右〕

浄真寺仏像修理報告書〔同右〕

龍津寺東遺跡Ⅱ〔昭島市教育委員会〕

西上遺跡〔同右〕

埋蔵文化財保護の手引〔同右〕

伝統的建造物等の所在確認調査報告書〔八王子市教育委員会〕

港区No.91遺跡高齢者在宅サービセンタ

1等建設に伴う発掘調査報告書〔南麻布福祉施設建設用地内遺跡調査会〕

東京都の近代洋風建築〔東京都教育庁〕

東京都青梅市神社本殿調査報告書〔同右〕

府中の家並地図〔東京府中市教育委員会〕

遠藤山遺跡発掘調査報告書〔中野区教育委員会〕

豊島区地域地図 第4集〔豊島区立郷土資料館〕

座間市史 2〔座間市〕

一枚の古い写真〔小田原市立図書館〕

秦野1990 HADANO 6今〔秦野市〕

日本近世初期における渡来朝鮮人の研究〔鶴岡裕〕

福井市史 資料編10〔福井市〕

松平春嶽公百年記念講演録〔福井市立郷土歴史博物館〕

甲斐国「浪人」の意識と行動〔山本英二〕

天狗沢瓦窯跡発掘調査報告書〔山梨県教育委員会〕

島町教育委員会

真田宝物館図録〔長野市教育委員会〕

磐田市史通史編 中巻〔磐田市〕

沼津市歴史民俗資料館資料集 9

半田市誌資料編Ⅴ・Ⅵ・文化篇〔半田市〕

渥美町史歴史編上・下巻・考古・民俗編〔愛知県渥美町〕

四日市市史 第8巻〔四日市市〕

鳥羽市史 上・下巻〔鳥羽市〕

鎮国の世にロシアを見た男大黒屋光太夫〔鈴鹿市教育委員会〕

草津市史 第6巻〔草津市〕

草津市史 第2巻〔草津市〕

草津市史 第2巻〔同右〕

長岡京市文化財調査報告書 第28冊〔長岡京市教育委員会〕

岡京市教育委員会

宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第16・17集〔宇治市教育委員会〕

向日市埋蔵文化財調査報告書 第19・32集〔向日市教育委員会〕

精華町の寺社と美術〔改訂版〕〔京都府精華町〕

精華町〔同右〕

羽曳野市史文化財編 別冊 絵巻物集〔羽曳野市〕

大阪市史史料 第32輯〔大阪府史料調査会〕

鉄道延伸関連文書〔大阪府岬町教育委員会〕

泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要 X〔泉佐野市教育委員会〕

ポロタンキ遺跡〔北海道沙流郡門別町教育委員会〕

青森県立郷土館調査報告 第28・29集

弘前1989市勢要覧

北上市文化財調査報告 第61集〔北上市教育委員会〕

東北歴史資料館資料集 15・19

仙台市文化財調査報告書 第138・153集〔仙台市教育委員会〕

甕る遺産仙台城現代複合図〔同右〕

平成2年度秋田城跡発掘調査概報〔秋田市教育委員会〕

寺内焼窯跡〔同右〕

新庄市横前の瓦人形〔新庄市教育委員会〕

玉造町史資料玉造町字界地形図〔茨城県玉造町〕

古河の名妓昔かたり〔中川保雄〕

南河内町史資料集 4〔栃木県南河内町〕

日本のロビンフッド那須与一は生きている〔栃木県立博物館〕

那須与一の歴史民俗的調査研究〔同右〕

群馬県史 通史編2〔群馬県〕

三郷市史 第九巻〔三郷市〕

大井町議会史 本史・資料編〔埼玉県大井町議会〕

井町議会

おおい町議会だより復刻版〔同右〕

三軒屋遺跡89—4区調査報告〔泉佐野市教育委員会〕

三軒屋遺跡89—6区調査報告〔同右〕

使屋遺跡発掘調査報告書〔同右〕

若宮遺跡発掘調査報告書〔同右〕

阪南町埋蔵文化財発掘調査 XI〔大阪府阪南町教育委員会〕

卑弥呼とその時代〔泉南市教育委員会〕

兵庫県史史料編 中世六〔兵庫県〕

福岡町史 第四卷〔兵庫県福岡町〕

西脇の地名〔西脇市郷土資料館〕

出雲松江藩「出入捷覧」データベース

化のための基礎作業〔安澤秀二〕

岡山県史 第二・五・十七卷〔岡山県〕

中山村史〔広島市〕

戸坂村史〔同右〕

福岡県史近代史料編 福岡県地理全誌四

・福岡勸業雑誌・嘉穂銀行〔福岡県〕

神園山瓦窯址〔新熊本市史編纂委員会〕

萩町史〔大分県萩町〕

高鍋町文化財調査報告書 第6集〔宮城県高鍋町教育委員会〕

高鍋町文化財調査報告書 第6集〔宮城県高鍋町教育委員会〕

嶺南日誌 第一卷〔宮崎県立図書館〕

平成2年度農業基盤整備事業に伴う発掘調査事業概要報告書〔宮崎県教育委員会〕

国衙・郡衙・古寺跡等遺跡詳細分布調査報告書 III〔同右〕

天神河内第1遺跡〔同右〕

えびの市埋蔵文化財調査報告書 第5・

7・8・9集〔えびの市教育委員会〕

仏教図書共通分類表一九八九年版〔仏教図書館協会〕

写真集近代日本を支えた人々〔東京都港区立郷土資料館〕

日本全史ジャパン・クロニクル〔講談社〕

現代社会の諸問題と提言〔松山大学〕

徳島県博物館三十年史

岩手県立博物館10年のあゆみ

財団法人広岡コレクション記念財団蔵品

図録〔兵庫県立歴史博物館〕

収蔵品目録 浮世絵〔足立区立郷土博物館〕

京都大学大学部博物館図録 第3冊

浅草寺日記 第十四卷〔金龍山浅草寺〕

図書寮叢刊 九条家本除目抄上・仙洞御

移徒部類記下〔宮内庁書陵部〕

大日本史料 第九編之十九・第十編之二

十・第十二編之五十二〔東京大学史料編纂所〕

大日本古文書 家わけ第十東寺文書之九・

幕末外国関係文書之四十三〔同右〕

大日本古記録 言経卿記十四〔同右〕

大日本維新史料類纂之部 井伊家史料十

七〔同右〕

日本関係海外史料 オランダ商館長日記

譯文編之七〔同右〕

明治大学刑事事博物館資料 第12・13集

可睡斎史料集 第二卷〔思文閣〕

北条為昌の支配領域に関する考察〔黒田

基樹〕

日露戦後経営としての殖産興業〔大森一

宏〕

洋学資料による日本文化史の研究 IV

〔吉備洋学資料研究会〕

高句麗広開土王碑が語る古代の東アジア

と日本〔目黒区守屋教育会館郷土資料

室〕

目黒区所蔵高句麗広開土王碑拓本写真集

〔同右〕

西園寺公望傳 第二卷〔立命館大学〕

慶応義塾図書館所蔵江戸時代の寺社境内

絵図 下〔慶応義塾大学三田情報セン

ター〕

隠岐流人に関する研究〔松尾寿〕

広島経済大学研究双書 第7冊

華族列傳國乃礎 上・中・下編〔蔵会館〕

國乃礎後編上・下編〔同右〕

日立ソフトウェアエンジニアリング史

2

租税資料叢書 第五卷〔国税庁税務大学

校租税資料室〕

「異文化を結ぶためのメッセージ」井上

円了記念学術センター開設記念東洋大

学国際シンポジウム〔東洋大学〕

中央大学史資料集 第七・九集

神奈川大学史資料集 第七集

諸国叢書 第八輯〔成城大学民俗学研究

所〕

資料文庫 I〔宮本記念財団〕

南山大学人類学研究所叢書 IV

極楽の魚たち〔リプロボート〕

住友別子鉱山史 上・下・別巻〔住友金

属鉱山株式会社〕

郵政省郵政研究所附属資料館研究調査報

告 2・3

石炭研究資料叢書 No.12〔九州大学石炭

研究資料センター〕

三井文庫別館蔵品図録 茶道具Ⅱ

苦小牧市博物館所蔵資料目録 5

桑折町歴史資料所在目録 第8・15分冊

〔福島県・桑折町史編纂委員会〕

藤沢市史資料所在目録稿 第21集〔藤沢

市文書館〕

明治大学刑事事博物館所蔵文書地名表

幸手市史調査報告書 第1・3集〔幸手

市教育委員会〕

日本銀行所蔵貨幣館資料目録〔その2〕

〔証券類〕〔日本銀行金融研究所〕

群馬県近世史資料所在目録 35・36〔群

馬県教育委員会〕

富山県公文書館文書目録 歴史文書四・

五

富山県行政文書目録 第一集〔富山県公

文書館〕

鈴鹿市史史料目録 第一・二号〔鈴鹿市

教育委員会〕

愛媛県東宇和郡野村町湊筋公民館所蔵文

書目録稿〔柚山俊夫〕

津市図書館蔵本文庫目録

津市図書館郷土資料目録
姫路市史編集資料目録 41〔姫路市教育
委員会事務局市史編集室〕

図書館報別冊 明治期刊行資料目録1
〔東京家政学院大学附属図書館〕

淡路文化史料館収蔵史料目録 第6集
〔洲本市立淡路文化史料館〕

〔徳島県 脇町史料目録 第一集〔脇
町史編集委員会〕

国立歴史民俗博物館蔵資料概要
国立歴史民俗博物館映像音響資料概要

岐阜県所在史料目録 第28集〔岐阜県歴
史資料館〕

歴史収蔵資料目録 十六〔瀬戸内海歴史
民俗資料館〕

岡山県総合文化センター郷土資料増加図
書目録

岩井市史資料目録 第一集・第二集
西条藩領伊予国宇摩郡入野村庄屋山中家

文書目録〔高橋啓〕
北海道開拓記念館収蔵資料分類目録 11

北海道開拓記念館一括資料目録 第23集
収蔵資料目録2 小谷三志関係資料目録

〔鳩ヶ谷市立郷土資料館〕
札幌大学図書館蔵書目録 第3巻

北海道立図書館増加図書目録 平成元年
度

青森県立郷土館収蔵資料目録 第1集
伊勢崎市立図書館増加図書目録 平成元

年度

成田図書館新着図書目録 第57・61・69・
70号〔成田山弘教図書館〕

東京都立中央図書館逐次刊行物目録 新
聞・雑誌

井手三郎文庫目録〔東京大学法学部附属
近代日本法政史料センター明治新聞雑
誌文庫〕

図書館内 No.45〔佼成図書館〕
神奈川県立図書館蔵書目録 和書の部第

20
学術雑誌目録〔南山大学人類学研究所〕

札幌大学図書館所蔵雑誌目録 一九八九
年版補遺1

柳沢文庫所蔵品目録
滋賀県地方行政資料目録 No.18・23・24

〔滋賀県立図書館・滋賀資料室〕
大阪市立中央図書館蔵書目録 第21巻

長崎県立長崎図書館蔵書目録
長崎大学教育学部業績目録 No.1・2

都政史料館増加図書目録 1〔東京都〕
浦和市史 通史編1・2 第二巻古代中

世史料編2・第三巻近世史料編2・3・
IV・第四巻近代史料編2・3・IV・民
俗編・考古資料編〔統編〕

東京都立中央図書館蔵書目録一九八五―
一九八八 総記哲学歴史・芸術語学文
学・書名索引・著者名索引

長野市立博物館収蔵資料目録 自然2
〔長野市立博物館分館茶臼山自然史館〕

西明寺歴史資料目録〔愛知県教育委員会〕

福岡市民図書館マイクロフィルム所蔵渡邊
家文書目録

三宅長春軒文庫目録〔福岡市民図書館〕
釧路市立博物館収蔵資料目録 (VI) 歴
史資料目録(1)

札幌市中央図書館郷土資料目録 本編増
補改訂版・索引編

岩手県立博物館収蔵資料目録 第8集
宮城県桃生郡桃生町所在文書目録集〔石
巻古文書の会〕

神山家文書整理目録 第II期分之二・第
II期分之二〔同右〕

福島県山都町史料目録 第8集〔山都
町教育委員会〕

土浦市史料目録 第五集〔土浦市教育
委員会〕

群馬県郷土資料総合目録 追録12〔群馬
県立図書館〕

村史調査報告書第二集 川里村諸家所蔵
文書目録(1)〔埼玉県川里村教育委員会〕

収蔵文書目録 第四集〔千葉県文書館〕
明治大学刑事博物館目録 第56号

学習院大学史料館所蔵史料目録 第10号
芭蕉記念館所蔵資料目録 VI〔江東区芭
蕉記念館〕

日本経済統計資料総合目録 No.10〔予備
版〕〔経済資料協議会〕

新聞記事目録 第五集〔平塚市博物館市
史編さん係〕

〔神奈川県〕寒川町史料所在目録 第

7集〔寒川町企画部町史編さん課〕
寒川町史新聞記事目録 第4集〔同右〕

横浜開港資料館所蔵芝居番付目録
横浜開港資料館所蔵新聞雑誌目録

富山県公文書館文書目録 歴史文書六
高樹文庫資料目録〔古文書〕〔新湊市教
育委員会〕

沼津市明治史料館史料目録 10・11
〔静岡県〕菊川町郷土史料目録〔第10集〕

〔菊川町史編さん委員会〕
中世民衆寺院の研究1〔財〕元興寺文化
財研究所

城郭関係図書所在一覧〔姫路市教育委員
会〕

行政資料目録追録 第5号〔愛媛県学事
文書課行政資料室〕

収蔵品目録 5・6〔福岡市博物館〕
公文類従目録 第7〔国立公文書館〕

内閣文庫所蔵正保城絵図II―13〔同右〕

平成四年度 (一)

北海道医事文化史料集成―続―〔松本明
知〕

「北の歴史・文化交流研究事業」中間報
告〔北海道開拓記念館〕

新札幌市史 第二巻〔札幌市教育委員会〕
御用格〔寛政本〕上・下巻〔弘前市教育
委員会〕

弘前藩の刑法典(十二)・(十三)〔橋

本久)

九戸の戦関係—文書集・—軍記・記録集

〔二戸市歴史民俗資料館〕

山形村埋蔵文化財調査報告書 3〔岩手

県山形村教育委員会〕

気仙沼市史 VI〔気仙沼市〕

銚子場関係資料「金局公用誌」一・二の

上・二の下・三・五〔石巻市教育委員

会〕

石巻古文書の会テキスト解説シリーズ

第二冊

仙台市文化財分布調査報告 V・VI〔仙

台市教育委員会〕

鹿角市史資料編 第二十三集〔鹿角市〕

御亀鑑 第四卷〔秋田県立秋田図書館〕

村山市史 本巻一〔村山市〕

郷土資料叢書 第二十輯〔新庄市立図書館〕

江市〕

山形市史資料 第79号〔山形市〕

西川町史資料 第17号〔山形県西川町教

育委員会〕

山形県教育史 通史編上巻〔山形県教育

委員会〕

白河市史 第五巻〔白河市〕

梁川町史 第11巻〔福島県梁川町〕

白沢村史 資料編〔福島県白沢村〕

福島県山都町史資料集 第十集〔山都町

教育委員会〕

土浦市史資料 第一集〔土浦市教育委員

会〕

土浦史備考 第一巻〔同右〕

岩井市史民俗調査報告書 第一集〔岩井

市〕

南河内町史 第二巻〔栃木県南河内町〕

とちぎの祭りと芸能〔栃木県立博物館〕

群馬県史 通史編5・6〔群馬県〕

老農船津伝次平—その生涯と業績をつづ

る45話—〔柳井久雄〕

群馬の寺子屋〔同右〕

所沢市史 上〔所沢市〕

所沢市史調査資料22・26・28〔所沢市史

編さん室〕

浦和市史調査報告書 第十六・十八集

〔浦和市総務部市史編さん室〕

流山市史 文化財編〔流山市立博物館〕

君津市史 史料集—〔君津市〕

千葉県議会史 第六巻〔千葉県議会〕

佐倉史断想〔高橋健一〕

—〔同右〕

国分寺市史 下巻〔国分寺市〕

世田谷区史料叢書 第六巻〔世田谷区立

郷土資料館〕

大場美佐の日記 三〔東京都世田谷区教

育委員会〕

新編岡崎町史 4 近代〔岡崎市〕

豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第13集

〔豊橋市教育委員会〕

牛川西部・大岩南地区土地区画整理事業

に伴う埋蔵文化財分布調査報告書〔豊

橋市教育委員会〕

三重県史 資料編近代4〔三重県〕

草津市史 第7巻〔草津市〕

史料京都の歴史 第13巻南区〔京都市〕

平等院阿弥陀堂中島発掘調査報告〔宇治

市教育委員会〕

宇治二子山古墳とその時代〔同右〕

宇治市文化財調査報告書第2冊〔同右〕

大阪府の百年〔山川出版社〕

藤井寺市史 第十巻〔藤井寺市〕

大阪府市史資料 第三十三・三十四輯〔大

阪市史料調査会〕

食野家関係史料 第一集〔中井信彦〕

第四回歴史の華ひらく泉南シンポジウム

中世の都市と農村〔泉南市〕

雄略天皇陵と近世史料〔西田孝司〕

平成2年度泉佐野市埋蔵文化財発掘調査

概要〔泉佐野市教育委員会〕

泉佐野市埋蔵文化財発掘調査報告 16

〔同右〕

兵庫県史料資料編 近世2〔兵庫県〕

明石市史資料〔大正期編〕 第八集〔下

〔明石市教育委員会〕

水見百年史〔水見市役所〕

松村屋文書 その一・五〔水見市立博物

館〕

宮永家文書 その一・五〔同右〕

〔以下次号〕

彙報

○平成四年度史料管理学会研修会〔通算第

三八回〕の開催

本年度の研修会は、長期研修課程が、

前期は平成四年七月六日・八月一日、後

期は平成四年八月三十一日・九月二六日に、

国文学研究資料館において開催された。

また、短期研修課程は、平成四年一一

月一六日・一一月二八日、ホテル千秋閣

において開催される〔既に受講者は決定

済み〕。長期・短期の研修内容は、左記

の通りである。

*長期研修課程

〔前期〕

(1) 文書館総論 森 安彦

当館教授

(2) 史料保存環境論 高橋 実

茨城県立歴史館主任研究員

(3) 地域社会と文書館 藤沢市文書館における史料管理

藤沢市文書館長 高野 修

(4) 情報関連法制 信州大学教育学部教授 井出 嘉憲

(5) 史料の保存科学 東京国立文化財研究所修復技術部

第二修復技術研究室長 増田 勝彦

東京芸術大学美術学部講師

稲葉 政満

東京修復保存センター

「五日市アトリエ」代表 坂本 勇

(6) 史料の収集と受入 仲田 凱男

(7) 栃木県文書館副主幹
古代中世史料論・史料編纂所における史料管理

千々和 到

(8) 東京大学史料編纂所教授

大藤 修

(9) 当館助教授

近世史料論総論

同 前

00 近世史料論Ⅰ(幕藩史料)

大友 一雄

(11) 当館助手

近世史料論Ⅱ(町方史料)

鶴岡実枝子

(12) 当館教授

近世史料論Ⅲ(村方史料)

渡邊 尚志

(13) 当館助手

史料所在調査法

渡邊 尚志

(14) 同 前

史料管理プログラムの作成

安藤 正人

(15) 当館助教授

近世史料の整理と検索手段の作成

森 安彦

(同右)

当館助手

渡邊 尚志

渡辺 浩一

〔後 期〕

(1) 史料管理学序論

当館助教授 安藤 正人

(2) 組織体と記録

産能大学長 松田 武彦

(3) 記録管理論

千代田化工建設株式会社参事

作山 宗久

(4) 歴史学と史料

お茶の水女子大学文教育学部教授

大口勇次郎

(5) 文化財保存施設の防災対策

都市防災研究所研究部長 小川雄二郎

(6) 裁判記録の保存と利用

弁護士 竹澤 哲夫

(7) 写真史料の保存

千葉大学工学部技官 荒井 宏子

(8) マイクロ写真の利用

大阪ビジュアル・コミュニケーション

専門学校長 後藤 公明

(9) 国立国会図書館における史料管理

海外所在史料の収集と利用

国立国会図書館政治史料課長

枝松 栄

00 国立公文書館における史料管理

国立公文書館公文書課長 高山利昭

(11) 埼玉県立文書館における史料管理

史料の利用と情報サービス

埼玉県立文書館行政文書課主査

白田 勝美

(同右) 古文書課主任 太田 富康

02 情報提供サービス機関としての図書館と文書館

小平市中央図書館主事 蛭田 廣一

03 近現代史料論Ⅰ(官公庁史料)

群馬県立文書館指導主事 小暮 隆志

04 近現代史料論Ⅱ(民間史料)

当館教授 丑木 幸男

05 現代行政文書の評価と移管

山口県文書館専門研究員 戸島 昭

06 近現代史料の整理と検索手段の作成

東京都公文書館主事 水野 保

07 史料の修復と補修

宮内庁書陵部修補師長 古関 豊

(同右) 修補師長補

吉野 敏武

08 コンピュータの利用

神戸商科大学情報処理教育センター

助教授 周防 節雄

当館助教授

山田 哲好

*短期研修課程

(1) 文書館総論

当館教授 森 安彦

(2) 史料の保存科学

東京芸術大学美術学部講師

稲葉 政満

(3) 徳島県立文書館における史料管理

徳島県立文書館長 斎藤 智

(4) 地域社会と文書館

(同前) 副館長 大和 武生

(5) 近現代史料の整理と検索手段の作成

北海道立文書館公文書係長

鈴木 英一

(6) 史料の修復と補修

宇佐美国宝修理所長 宇佐美直八

(同右) 所員

宇佐美直秀

(同右) 所員

田中 保

(7) 近世史料論Ⅰ(総論・幕藩史料)

当館助手 大友 一雄

(8) 近世史料論Ⅱ(町方・村方史料)

同 前

(9) 近現代史料論

当館教授 丑木 幸男

00 近世史料の整理と検索手段の作成

当館助教授 大藤 修

(11) 史料の保存と管理

同 前

山田 哲好

(12) 史料の利用と情報サービス

同 前

安藤 正人

○評議員会と運営協議員会の開催

本年七月一七日、九月一七日に評議員

会、六月一七日、八月二〇日、九月三日

に運営協議員会がそれぞれ開催され、管

理運営の概況、平成三年度の事業概況、

平成五年度概算要求、館長人事等の議事

が評議ないし協議された。

○評議員の退任と新任(敬称略)

退任(本年六月三〇日付) 阿部秋生、

上山春平、加藤周一、児玉幸多、斎藤

正、阪倉篤義、林 大、宮川 満

送大学広島ビデオ学習センター長)、

藤澤令夫(京都国立博物館長)、小玉

正任(国立公文書館長)、網野善彦

(神奈川大学短期大学部教授)、堤

精二(放送大学教授)、佐竹昭廣(成

城大学文学部教授)、山田俊雄(成

城大学長)、小林清治(東北学院大学

文学部教授)

○運営協議員の退任と新任(敬称略)

退任(本年七月三十一日付) 稲賀敬二、

小林清治、佐竹昭廣

新任(本年八月一日付)

枋尾 武(成城大学文学部教授)

朝尾直弘(京都大学文学部教授)

○文部省科学研究費補助金の交付

一般研究A「史料所在情報の集約とそ

の解析的研究」(代表森安彦)に四年計

画のうちの三年目として、四〇〇万円が

交付された。

一般研究C「史料管理学に関する文献

情報の収集とデータベース作成について

の基礎的研究」(代表山田哲好)に八〇

万円が交付された。

奨励研究A「近世の贈答儀礼に関する

基礎的研究」(代表大友一雄)に九〇万

円が交付された。

○出版物の刊行

1「日本実業史博物館旧蔵古紙幣図録」

【史料館叢書】別巻2)を来年三月

に刊行予定。

2定期刊行物としては「信濃国松代真田

家文書目録(その六)」(史料館所蔵

史料目録)第五八集」と「尾張国知多

群半田村中楚家文書目録」(「同前」

第五九集)を来年三月に刊行予定。

3「史料館研究紀要」第二四号を来年三

月刊行予定。

4「史料館報」第五七号(本号)を刊行。

なお、次号は来年三月刊行予定。

○館内研究会

第一一九回(平成四年四月二一日)

歴史情報資源研究センターについて

第二二〇回(平成四年五月二一日)

『史料館収蔵史料要覧』(仮称)の刊行

について

第二二一回(平成四年六月一八日)

平成四年度史料管理学研修会講義構想

森 安彦・丑木 幸男・山田 哲好

第二二二回(平成四年九月二四日)

文部省科学研究費補助金一般研究A研究

課題「史料所在情報の集約とその解析的

研究」について

○来訪者見学者(海外)

平成四年九月一四日、中国国家档案局

○海外出張

安藤正人が「第二二回国際文書館会議」

及び「アメリカ記録史料科学者協会第五

六回年次大会」参加のため、本年九月五

日・二七日の間カナダ、アメリカ合衆国

へ出張。

○海外出張(私費)

丑木幸男が「第二二回国際文書館会議」

参加及び文書館運営方法研修のため、本

年九月五日・二〇日の間カナダ、アメリ

カ合衆国へ出張。

○人事異動

◇昇任(平成四年四月一日付)

教授(助教授より) 丑木 幸男

助教授(助手より) 山田 哲好

○平成五年度史料管理学研修会の開

催予定

平成五年度の史料管理学研修会は

長期研修課程が前期七月五日・七月

三〇日、後期八月三〇日・九月二四

日(前、後期とも最後の二週間はレ

ポート作成に充てる)、国文学研究

資料館において、また短期研修課程

は一月八日・一月二〇日(最後の

の一週間はレポート作成に充てる)、

京都市において開催の予定である。

なお、研修レポートは、各自の自宅

ないし職場において作成するものと

する。

閲覧時間変更のお知らせ

完全週休二日制の実施に伴い、土

曜日を閉館とし、平日の利用時間を

次のように変更します。

午前九時三〇分～午後五時

なお、その他の閉館及び閲覧業務

停止日は従来(以下)の通りです。

日曜、祝日及び振替休日、年末年

始(一二月二七日・一月五日)、

蔵書点検及び書庫内くん蒸期間

(四月末～五月上旬)

史料館報 第五七号

平成四年(一九九二)九月三〇日

編集兼 国文学研究資料館

発行者 史料館

〒四二東京都品川区豊町一ノ六ノ一〇

電話〇三(三七八五)七一一一〇

印刷所

東京都台東区寿三ノ一四ノ五

有限会社 スミダ

電話〇三(三三八四)二七三三三